

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 中村菊男著 『昭和政治史』   |
| Sub Title        | K. Nakamura : The Japanese political history of Showa period  |
| Author           | 石川, 忠雄(Ishikawa, Tadao)   |
| Publisher        | 慶應義塾大学法学研究会   |
| Publication year | 1958  |
| Jtitle           | 法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.31, No.10 (1958. 10) ,p.92- 97   |
| Abstract         |   |
| Notes            | 紹介と批評   |
| Genre            | Journal Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19581015-0092">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19581015-0092</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



中村菊男著

## 『昭和政治史』

一

本書は、著者もいうように、「滿洲事變頃から太平洋戦争敗戦にいたる間の歴史を主題として記述し、それに戦後十二年の政治を素描した」(序七頁)ものである。よくいわれることであるが、本書のように現代を對象として歴史をあむことは決して容易なことではない。それは、いうまでもなく、使用される資料があまりにもなまなましく、現存する政治勢力の利害と直接結びついたものが少くないために、極めて重要な資料が公表されなかつたり、公表された資料を公正に判断することが非常に困難であつたりするからである。しかし、このような困難はあるにしても、現代史を正しくあむための努力は、不斷に且つ着實におこなわれなければならない。なぜならば、それは、われわれが現代をどのように理解し、そのなかでわれわれがどのように生きるか、ということと直接に結びついているからである。

わたくしは、日本現代史を専攻するものではないが、こんにちまでのところ、この問題について、わが國において十分な研究の成果がうみだされているように思われない。すでに多数の重要な資料が公表され、太平洋戦争史、その他昭和政治にかんする断片的な著作は存在するけれども、これを日本近代化の過程との關連において包括的にとりあつかつた書物は、極めて数少いように思われるのである。本書は、このように数少い包括的な日本現代史研究の著作の一つであるが、たとえば遠山茂樹・今井清一・藤原彰「昭和史」(岩波書店・昭和三十年)などのようにマルキシズムの立場からではなく、著者自身の解釋を基礎として昭和における政治的發展過程を考察したものであり、その意味においてユニークな存在といふことができるであらう。

本書の著者中村菊男教授については、ここであらためて紹介する必要はないと思う。中村教授は現在本大學法學部政治學科に所屬し、こんにちまでにすでに、「政治學」(全訂版・有信堂・昭和三十一年)・「政治心理學」(改訂版・有信堂・昭和三十二年)・「民主社會主義の理論」(青山書院・昭和二十七年)・「民主社會主義の思想」(青山書院・昭和二十七年)・「近代日本と福澤諭吉」(泉文堂・昭和二十八年)・「近代日本の法的形成」(有信堂・昭和三十一年)・「明治的人間像―星亨と近代日本政治」(慶應通信・昭和三十三年)など極めて多数の著作を發表され、本書の刊行後も「伊藤博文」(時事通信社・昭和三十三年)を公表されている。このような著作からも判断されるように、著者の現在の主要な學問的關心は、政治學的視角よりする日本近代化過程の研究をつうじてその政治學的成果を

豊富にし發展させていくところにおかれていようであり、この意味においても昭和政史を書かれるうえに適任であるといわなければならない。

ところで本書の内容の紹介にはいるまえに、ここでとくに指摘しておきたいのは、著者が昭和政治の展開過程を考察するにあたって、つぎの二つの點に深い注意をはらつてゐるということである。すなわち、その一つは、政治においては人間の持つ非合理的性格が非常に重要な役割を演じるといふ事實であり、ここに「熱血漢や激情家が出現してそれが世の中を動かすにいたる理由がある」(序四頁)のであつて、昭和政史の過程は「自意識過剰なこの政治的非合理的性格」からもとらえられなければならないとされていることである。またいま一つは、昭和政治における軍國主義の進出にあつて、日本國民がそれに「大小強弱の相違はあれ、とにかく同調したことはたしかであり」(序三頁)、このように國民を軍國主義化へ同調させた重要な原因が日本の共同社會そのものなかにも存在していたということである。著者のいうこの二つの點は、われわれが昭和政治の展開過程を考察する場合に、自明の事實であるにもかかわらず、とかくなおざりにしがちなものである。われわれが、政治における人間の行動をイデオロギーによつて支配され、合理的な判断や思考によつてみちびかれたものとして考察することはよくあることであり、日本の軍國主義化の過程を分析する場合でも、一般國民を軍國主義的指導者の指導と宣傳によつて欺かれた被害者としてのみみることも少くない。このような見方が昭和政史を正しく理解するうえになんら役立ちえないものであることはいうまでもない。

## 紹介と批評

ころであらう。昭和政治の發展過程において、人間の持つ非合理的性格がはたした役割を具體的に正しくとらえ、その位置づけを公正におこなうことができるならば、それはわれわれの昭和政史に對する理解を促進するうえに極めて有意義であらうし、また一方、日本國民が、軍國主義の被害者でありながら同時に日本の軍國主義化を促す要素をもつていたという二面的性格を、昭和政治の具體的な展開過程のなかで適確に把握することができるならば、それもまた昭和政史の正しい理解のための不可缺の要件であるといわなければならない。もつとも、これらの課題を完全に實現することは、決して容易なことではない。しかし、著者が従來の昭和政史とは異り、積極的にこの問題を提出し、その角度から昭和政治の展開過程を檢討しようとした意圖は、十分評價されなければならないと思ふのである。

ところで本書の内容についてであるが、本書は全部で十一章からなりたつてゐる。しかし、内容的にみて、だいたいこれを四つの部分に區別することができるように思われる。すなわち、第一の部分は、日本近代化の過程とその性格の分析をつうじて昭和における軍國主義擡頭の基礎を明らかにしようとした部分であり、第二の部分は、軍國主義勢力の擡頭と政黨政治の没落から日華事變および太平洋戰爭にいたる経過の分析であり、第三は連合國占領による日本政治體制の變革過程をとりあつた部分であり、第四は、日本における社會主義および共産主義運動の消長にかんする問題を取りあつた部分である。そこでつぎに、この四つの部分について、そのおのおの内容を紹介することとしよう。

## 二

まず第一の部分であるが、第一章近代日本政治の進展、がこれにあたる。この章で著者は、日本近代化過程にあらわれたいくつかの基本的特徴を指摘し、それらの特徴との関連において軍國主義擡頭の諸要因を明らかにすることに努めており、本書でもつとも重要な部分をなしているように考えられる。著者によれば、日本が明治維新以來、近代の國家體制をつくりあげるにあつて重要な障害となつたものは、不平等條約その他に象徴される外國の壓力であり、當時の明治政府の指導者はこのような條件のもとに外國勢力と對等の地位に日本を引きあげるためには、「産業の近代化と軍事力の擴充」とを實行しなければならぬと考へた。がんらい、明治維新の擔い手であつた當時の指導者は、封建體制に對する不満分子ではあつたけれども、眞の意味における民主主義的な近代思想の持ち主ではなかつたが、したがつてかれらは、「産業の近代化と軍事力の擴充」とを「軍部官僚を支柱とする強力な中央集權的な體制をつくる」(六頁)ことによつて實現しようとしたのである。もつともその反面、明治維新以降自由主義思想も輸入され、その影響をうけた人々は藩閥勢力に對する不満分子と結んで自由民權運動を發展させ、不徹底なものではあつたが立憲制度のもとに、明治から大正にかけて「藩閥の優位における藩閥勢力と政黨勢力との權力分制」(七頁)の状態をつくりだすこととなつたのである。しかし、軍事力の擴充は、前述したように藩閥勢力の中心的目標の一つであつたばかりでなく、當時の指導者、有識者層全體をつうじて廣く承認されていた考へ方であ

り、かれらは、西歐諸國のアジア進出を防衛するためには、「日本が朝鮮半島からアジア大陸に進出する」(九頁)ことが必要であると考えていた。しかも、日本共同社會の内部には、「軍人優先、軍部尊重の考へ方」が存在し、それが天皇中心主義と結びついて、軍部重鎮の考へ方を支える精神的風土と社會勢力とを形成していたのである。このようにして、軍部は、明治維新以來、日本政治のなかで大きな役割を果してきたのであるが、第一次世界大戦後における民主主義の風潮は日本の政界、學界、思想界、言論界に大きな影響をあたえ、著者のいう「なしくずし民主主義」の前進がおこなわれ、政黨政治の全盛時代にはいるとともに、軍部の日本政治における地位は、その影響をうけて壓迫され、低下することとなつた。このような状態に對する不満と近代戰の必要にこたへるべき國家體制の強化の要求とが、日本における立憲制度の不徹底性、經濟的危機の到來、政黨の權力鬭争と腐敗などの諸條件と相俟つて、軍部の危機感を増大させ、革新思想の擡頭とその政治への進出とをまねくこととなつたのである。著者は、このような軍部勢力進出の基礎條件を概括的に明らかにしたのち、滿洲事變後太平洋戰爭の敗戦にいたる軍部中心の政治體制をファシズムと規定する「天皇制ファシズム論」に言及し、日本には「中心となつた政黨もなく、長期にわたつて持續的に安定せる指導勢力となつた人々もなく……政治權力の構造は外觀的には天皇歸一というかたちで一元化されていたようにみえるが、實質的にいえば、權力は多元的に分散化され」(二六―七頁)ていたのであつて、これをファシズムと規定することはできない、としてその見解を明らかにしている。

第二の部分は、軍部勢力の擡頭から日華事變を経て太平洋戦争の終結にいたるまでの経過の考察にあてられており、第二章軍部勢力はいかにして擡頭したか、第三章滿洲事變勃發する、第四章日華の衝突はなにをもたらしたか、第五章政黨政治はいかにして凋落したか、第六章日本太平洋戦争に突入する、第七章榮光から悲劇へ、の六章がここにふくまれる。著者はまず第二章で、大正から昭和にかけて、藩閥勢力の統制力が失われていくにつれて軍部内にしだいに革新勢力と派閥對立が生まれ、それが民間右翼勢力と結びついて、いわゆる三月事件、十月事件、さらには五一五事件をひきおこし、ついに二・二六事件にいたつて皇道派對統制派の對立が統制派の勝利によつて統一され、軍部勢力の政治進出と大陸政策の推進を決定的なものにした過程を明らかにしている。第三章および第四章は、滿洲事變勃發の原因の究明から日華事變の發生にいたるまでの経過についての分析にあてられている。ここで注目されるのは、著者が滿洲事變を「日本國內情勢のうつ積した空氣を打破するための對外的解決手段であり……軍部が日本の現代政治の推進力として活動する突破口をひらいたものである」（六八頁）とし、その軍部の大陸政策推進の動力となつた「當時の雰圍氣」は、第一次大戦後の軍縮その他の壓迫に對する「軍人社會の欲求不満」が、海外の全體主義的革新思想の影響をうけて歸國した少壯將校の革新熱、および日本經濟とくに農村經濟の破綻と結びついてつくりだしたものであることを指摘していることである。そして、このような「當時の雰圍氣」が、軍をしてその吐け口を大陸にもとめさせ、それが軍内部の統制力の缺除と相俟つて關東軍を中心とする滿洲事變の計畫となり、滿

洲國の成立にみちびくとともに、これに期待をつないだ國民の同調もあつて軍部勢力の政治進出を可能にし、さらには日華事變へと前進することになつたとしてゐるのである。著者は、日華事變直前の日本の中國進出について、日本が諸外國のブロック經濟の強化によつて貿易による海外進出を阻止されはしないかという懸念をいだき、それが中國を確保しなければならぬとする見解をさらに促進する契機となつたことを明らかにし、日華事變に際して軍には「周到に準備された大陸侵略計畫があつた」（九八頁）わけではなく、いまのうちにたいておけば何とかなると思つたような氣持があつた、と述べているが、これは第二次國共合作を背景とする中國の抗日エネルギーの大きさを見誤つた當時の軍の國際情勢評價のあまさを示すものといえよう。かくて日華事變は、トラウトマン調停の失敗、汪政權の樹立などを経て太平洋戦争へと擴大の一途をたどることになるのである。

このような軍部の進出は、もちろんそれ相應の理由があつたにしても、それに対抗する政黨勢力の無力さがなかつたならば實現されなかつたに相違ない。したがつて政黨勢力凋落の過程を明らかにすることは、軍部進出のもつとも重要な條件を分析することであり、著者はこれを第五章でおこなつてゐる。それによると、五・一五事件當時の政黨内部には、すでに「二大政黨の對立をよるこぼす議會に絶對多數をもつ一國一黨的な強力政黨を欲する動き」があり、政黨相互間においても倫理的正当性を失うような行動がおこなわれていたばかりでなく、「みずからの立脚點をわすれ閣僚の地位にあこがれ、右往左往してゐた」（一一九頁）のであつて、政黨を政權か

ら排除しようとする當時の動きに對しても強い抵抗を示さなかつたのである。かくて、昭和十年の國體明徴問題を契機とする國民意識の國家主義的イデオロギーへの統一についてもこれに抵抗せず、党内分裂により自らその力を弱め、昭和十五年近衛文麿の政治新體制樹立への動きを機會として解黨し、日本憲政史上無政黨時代を現出することとなつたのである。

第六章は、日華事變の發展後、日獨伊三國軍事同盟の締結を経て太平洋戰爭に突入する経過を、また第七章は緒戦の勝利から敗戦にいたるまでの過程をとりあつてゐる。ここでは、事態の推移の一般的敘述に中心がおかれており、とくに問題となる點はないが、著者が太平洋戰爭の原因として、(一)アメリカの門戸開放機會均等政策と日本の對東亞政策の衝突 (二)日本における暗殺の脅威と言論壓迫 (三)ドイツ・イタリーの實力の過大評價 (四)アメリカの實力の過小評價 (五)アメリカの經濟壓迫、などを擧げているのは、概ね妥當な見解であるといつてよいであらう。また太平洋戰爭敗戦の原因の一つとして、政戦兩略の不一致いかなれば國務と統帥の分離があげられているのも、注目されてよいと思われる。

第三の部分は、占領時代における日本の政治體制變革の過程を考察したものであり、第八章占領政治時代はじまる 第九章講和條約後の日本、の二章がこれにあてられている。ここで著者は、占領政策にともなう憲法改正、政黨政治の復活、戦争裁判などの諸問題を合せて戦後政治の展開過程を概観し、中華人民共和國の成立を契機とする共產主義勢力の進出、朝鮮動亂の發生、などを機會に、アメリカが講和條約と日本の安全保障について考慮せざるをえなくな

り、一九五一年九月の對日講和條約、さらに日米安全保障條約を締結するにいたつた経緯を説明している。また第九章では、講和條約後の内閣の變遷、二大政黨對立時代の到來、日ソ國交問題についてふれている。この間の敘述は、簡潔に且つ要領よくこなわれており、この時期の政治の一般的経過を概観するのに便利である。

最後に、第四の部分にあたるのは、第十章無産運動から成長した日本社會黨 第十一章共產主義運動の消長、の二章である。第十章は戦前の無産運動から戦後になつて今日の日本社會黨がうまれてくるまでの経過の分析にあてられているが、この章の分析は極めて要領よくまとめられ、参考となるところが少くない。とくに戦前の社會主義運動が、小黨分立から統一へ、さらにまた分裂へという過程をくり返していつた経過およびその原因についての分析、さらに戦後における日本社會黨の性格についての論争、その分裂と統一にかんする敘述はとくにすぐれているように思われる。また第十一章では、コミンテルンと日本共產黨との關係、戦前の彈壓下における共產主義勢力の衰退、戦後の黨の再建とコミンフォルム批判、平和革命論から暴力革命論への轉換、などについて述べられている。

### 三

以上が本書の内容の概要であるが、ここでわたくしの讀後感を一言つけ加えておきたいと思う。

この書物は、前述したように、昭和史を主として政治的側面から概観したものであり、その意味において昭和政治史の諸問題が包括的にとりあげられ、昭和政治の展開過程は要領よくまとめられてい

る。とくに、著者が政治における非合理的性格を強調し、日本の軍國主義化の要因の一つを日本共同社會そのものなかにとめてい  
ることは、本書のすぐれた特徴であるといつてよいであろう。しか  
し、問題をやや詳細にみてもと、なおとりあげられなければならない  
ない點がないでもない。いまそのいくつかをつきに述べてみよう。

周知のように、日本が滿洲事變・日華事變を経て太平洋戰爭には  
いつていつたについては、軍部を中心として國際情勢に對する正當  
な評價が缺けていたことは明らかであり、このような評價の誤りが  
かれらを戰爭へ導く一つの大きな力となつたことは否定しえないと  
ころである。したがつて、昭和時期をつうじて、東洋をめぐる國際  
情勢の推移および國際情勢に對する軍部および各界の判斷がより詳  
細に究明されれば、日本の大陸政策の推進、さらには戰爭突入への  
要因がさらにはつきりしてくるよう思われるのである。この點に  
ついて一層の配慮が望ましいと思う。

第二の問題は、政黨勢力の衰退についてである。いうまでもなく  
政黨勢力は、軍事勢力に對抗するもつとも重要な政治勢力の一つで  
あり、いかに軍部勢力が革新思想の影響をうけその欲求不満から政  
治進出を企圖したとしても、もし政黨勢力がそれに對抗する力とし  
て確立されていたならば、軍部勢力が日本政治のなかで指導的立場  
につくことは、極めて困難なことであつたに相違ない。したがつて、  
政黨が、政權からしめ出されるまで、なぜ軍部勢力に對して積極  
的に對處しえなかつたのか、という問題を究明することは極めて  
重要であるといわなければならない。この問題については、ただた  
んに政黨間の權力獲得鬭争とか政黨の腐敗とかいうことではなく、

個々の具體的なケースについて政黨が軍部勢力の進出に對してどの  
ような内部的事情からどのような對應の仕方をしたかが詳細に検討  
されなければならないであろうし、日本の共同社會の性格および日  
本近代化の不徹底性との關連において、政黨それ自身のなかに、一  
方で軍部を批判しながら、他方でそれに同調するような性格が存在  
したということもいえるのではなからうか。これらの點についてよ  
り詳細な研究が必要であるように思われるのである。

最後に、著者の指摘するように、日本共同社會の内部に、軍部の  
進出を支持するような要因が形成されていたということは事實であ  
らう。しかしそのことは、著者のいう日本共同社會内部の諸要因  
が、日本における民主主義の發展を阻止するような性格をもち、軍  
國主義化の方向へのみ働くようなものであつたことを意味するのだ  
らうか。またもしそうであるとしたならば、このような日本共同  
社會の性格は太平洋戰爭の終了後どのような變革をこうむつたのだ  
らうか、またそれは、日本民主化との關係において現在どのよう  
に考えられるべきであらうか。これらは、いづれも昭和政治史に關  
心をもつわれわれにとつて極めて重要な問題であり、著者のいう日  
本共同社會の性格についてもと掘下げて検討しなければならな  
いように思われるのである。

もちろん、これらは、わたくしの希望を述べたものにすぎない。  
それは、昭和政治史を包括的にとりあつた本書の價値を損うも  
のではない。わたくしには、本書は、日本政治史を専攻する人々ば  
かりでなく、廣く一般に讀まれてもよい書物であるように思われ  
る。(慶應通信 三六〇圓)

(石川忠雄)